

宍戸隆之 (教養学部人間科学科)

「私の専門とは？」その形成過程



略 歴

- 1988年 山形県立米沢興譲館高校 卒業
- 1992年 福島大学教育学部 卒業
- 1994年 福島大学大学院教育学研究科
修士課程 修了 学位 修士(教育学)
- 1995年 米沢中央高等学校 教諭
- 2000年 宮城工業高等専門学校 助手
- 2001年 宮城工業高等専門学校 講師
- 2004年 宮城工業高等専門学校 助教授
- 2007年 宮城工業高等専門学校 准教授
- 2009年 仙台高等専門学校(名取) 准教授
(宮城高専と仙台電波高専の統合再編)
- 2009年 東北大学大学院医学系研究科
博士課程 修了 学位 博士(医学)
- 2010年 アメリカ合衆国 イリノイ大学アーバ
ナ・シャンペーン校 在外研究員 (1
年間)
- 2012年 仙台高等専門学校(広瀬) 准教授
- 2013年 仙台高等専門学校(広瀬) 教授
- 2013年 大阪教育大学教育学部 准教授
- 2020年 東北学院大学教養学部 教授

私の専門が形成された過程を紹介したいと思います。

まず、大学教員として受け持っている授業という側面から言えば、これまで7年間教員養成大学で体育科教育法を主な担当科目として行ってきましたので、最も得意とする授業が体育科教育法になります。本学では、文学部教育学科において小学校の教員養成を行っていますが、その中で行われている初等教科教育法(体育)がその科目にあたります。学部が異なりますので、その授業を担当することはないのかもしれませんが、そもそも私が大学の教員になった理由の一つが、実はその科目の存在があったからです。

これまでの私の教員経験は、非常勤講師も含めると、中学校、高等学校、高専、短大、大学においてあり、全ての学校で体育(スポーツ実技)の授業を担当しました。その中で、生徒や学生の体力・運動能力低下を肌で感じるようになり、そこを何とか改善できないものかと、自分が授業で担当した生徒や学生のために力を注いできました。しかしながら、それは、自分が担当した相手のみにしか働きかけることができず、そうこう考えているときに、大阪教育大学の教員公募を目にし、「これだ!」と思ったのです。

私がすべきことは、「体育の授業をきちんとできる小学校教員を育てること。そして、その小学校教員が、子どもたちの運動習慣形成に影響を与えることができるような教員になること。そのような教員を私自身の手で育てること

ができればいいのでは?」。そう思った私は、それまでは、全く知ることがなかった大阪教育大学の教員公募に応募し、教員養成大学の教員になることを目指したのです。その時、大阪には、知人もおらず、大阪教育大学にも、面接の際に初めて訪れたくらいで、未知の場所へ飛び込んでいく感じでした。その面接では、模擬授業も行われました。授業を行うことには、自信があったので、その時、「私よりも面白い授業をできる人はいないはずだから、この模擬授業に呼ばれたということは、この大学に採用される」と模擬授業をしながら確信していました。知人もコネも何もない中で、実力でそのポジションを得た瞬間だったと思います。

この授業力が身に付いた原点は、福島大学在学中にあります。私は、高校時代、ほとんど受験勉強をすることはありませんでした。もちろん毎日の課題はそれなりにこなしていました。しかしながら、受験勉強には何の面白さも感じず、授業を受けても大学受験対策なので、入試で点数を取るための手法を学んだことしか記憶にありません。そのような授業に対するイメージが、福島大学で受けた授業で大きく変わりました。特に保健体育関係の先生方が行う授業は、どの授業に出席しても、面白くて、「大学の授業って、なんて面白いんだろう」と、勉強することの面白さを大学生になって初めて知りました。

私は、部活動でバレーボールをするために福島大学を選びましたが、授業で得た知識が毎日のバレーボールの練習にすぐに生かせることばかりで、「自分の取り組みに知識が結びついて、何て面白いことなんだ」と、大学時代は、授業を受けるのが楽しみでした。大学時代は、興味深い授業をしてくれるたくさんの良い先生方に恵まれたと思います。そのおかげもあって、大学3年次のインカレでは、全国ベスト16、秋

季リーグ戦では、個人賞でスパイク賞を取るなど、大学時代に掲げていた目標を達成することができました。

その体験を踏まえ、私が教員になってから目指してきたことは、大学時代に受けたような面白い授業をすることでした。生徒や学生が、「それは自分の〇〇に生かせる」「ためになる」と思えるような授業をすることです。「なるほど!そういうことか!」となれば、興味を持ってくれることで、彼らの自己学習が始まります。要するに、彼らの学ぶ姿勢を育むということが、授業の目標となっていました。このようになると、彼らは、どんどん勉強してくれます。勉強することが面白くなります。そのような授業を行うことを目指して、より良い授業の探求をしていると言えるでしょう。

一方、実施している研究という側面から言えば、前述したより良い授業の探求について、データを集めて評価し、その授業改善のためのエビデンスが研究成果に結び付いていると言えます。最近では、ICTを活用して、ウェアラブルデバイスによって、身体活動情報を確認しながら運動する方法の効果を調査しました。子どもたちがあまり好まない持久走の体育授業中に、一人ひとりの心拍数を全員分表示して確認できたかどうかというものです。持久走が苦手な子どもたちは、息があがって遅いわけですが、心拍数が表示されると、クラスメイトの誰よりも運動強度が高いことが分かるわけです。クラスで一番頑張っていることが示され、自分の頑張りが周囲に認められたり、称賛されたりするわけです。心拍数を表示して実施した場合と、表示しないで実施した場合は、表示した方がより心拍数が高くなることが明らかとなりました。

このように、これまでの私の人生の歩みそのものが私の現在の専門と言えるでしょう。